

関西農業史研究会報

-No3-1979.4.10

第16回例会・1979.3.17 今井敏行氏
「明治期農村計画の事例」とその技術的
意義について-富山県大野庄地区舟川新の研究-

京大農経会議室にて、9名参加。

【報告要旨】

(I)はじめに

フィジカルな農村計画を、ここでは生産技術・社会関係等の受け皿としての農村空間の総合的・計画的再編と意義づける。そして我国における土地資本の蓄積様式の特質として、自然の加工の中に生産力発展の主導力を見る立場から、生産基盤である^{農地の}土地改良と生活基盤である集落の整備の一体的な事例の検討に入った。

丹波地区の舟川新は明治期の農事改良の流れの中で、明治憲法の確立をめぐって耕地整理を開始し、それを契機として散居形態から集居形態へと集落の整備をすすめる、農業生産や生活の共同性の向上を図った総合的な整備形態をもった計画事例である。

(II)舟川新の事例

舟川新は現在、富山県下新川郡朝日町大家庄地区に属する59戸ほどの集落である。

小川、舟川の合流点に隣接し、集落西側を小さな入川が乱流していて、氾濫の影響を受けやすい位置にあった。正徳年間に隣接する三枝橋他から分村した新田開発村である。

この事業は、明治30年頃、村第一の地主であった藤井十三郎が福野農学校教諭西村栄十郎の田区改正の講演を聴いて発案したのである。彼は村第二の地主の長男山崎市次郎とともに、若二人(23才・24才)で村の人々を説いて事業に取りかかった。ところが散居集落であるため整然とした田区に改正するには屋敷が邪魔になるところから、屋敷の集村化を決意し、さらに共同苗代・田植、生活改善、共同浴場兼集会所の建設、共同購入共同出荷、消防施設の設置等次々と各般にわたる整備改善を行なっていた。この耕地整理にとりかかるとすぐに耕地整理法が施行(明治33年)されたので、富山県第一号の耕地整理事業として県農会等の奨励も加わって進められた。この耕地整理はあわせて入川、舟川の河川改修と一体になっており、乱流していた入川周辺に残存する山林原野の開田がはかられたことは、小作料の安定とともに地主側の利害と密接に結びついていた点をうかがわせ重要である。(酒匂の十大利益)

この耕地整理および集落整備の結果、農道もなく小規模不整形

な田が入り組んだ平均3.1アールほどの水田から、整然とした1反区画と幅幅工いた農道(6尺巾)や用水排水兼用の水路をもつ水田に変わり、散居した屋敷林に囲まっていた屋敷も中央部道路(9尺巾)の両側に整然と列居することになった。

こうして、農作業では正条植、共同田植がはじまり、水のかげひきも良くなって乾田化がすすみ、裏作のシコゲが一面に広がると共に、一部に限られていた馬耕も全面的に行なわれるようになった。また農道の整備により運搬が人肩からリヤカーに変りなど各種の進歩が見られた。さらに集居化にともなって人々の交流も高まり、冬の除雪の苦勞がなくなるとともに共同作業が充実していった。共同施設の利用がこれらをさらに助長した。中央の道路の側溝を流る水路が流雪溝の役割をほたすと共に、水車をまわし人々には農作業の動力として利用することができた。

しかしながら、耕地整理による増歩地の売却がすべて村外地主に対して行なわれ、換地をめぐる争いや、浅耕土地帯における表土扱いの不十分さによる生産力の低下などの各種の要因が働いて、村内の困窮が深まり離村者もかなり見られた。

その後の推移がよくわからなかったため、耕地整理や集落整備の結果がどのような社会的変動に結びついていったかは不明であり、後に見られた小作争議との関連や経済的技術的動向については報告できなかった。

(四) 技術的意義

先述した耕地整理の効果、集落整備についての効果は大きく、生産力の上昇、共同性・利便性の向上が見られたが、その後の地主制の変化の中で効果は減殺されていったものと思われる。隣接する二部落の耕地整理をひき出したが、やはり換地をめぐり争いなどから、その後の耕地整理の継続・発展をむしろ遅延せしめたといわれている。

(報告の詳細内容は『農村計画』No3(1973-4)所収の今井氏の論文参照)

【討論要旨】

① 土地資本蓄積の特質について

我が国が天地の改良によって生産力を増大し、而して労働手段の改良に依拠するというのは、水田と畑の違いによるものであって、むしろ両者における土地の集約的利用の効率の違いに着目すべきであるという批判、中村尚理論自体に対する批判。

② 耕地整理の効果について

耕地整理をめぐり小作・地主、地主間の対抗関係として、換地・表土扱いの争いをとらえ、矛盾が社会的関連にどのように反映するのか、そして技術改良をすすめる姿勢にどう結びついてくるのかもとらえるべきである。あるいは耕地整理後の地主・小作人の取り分の変化が、自小作前進の規模拡大につながったかどうか、反収・小作料・費用の追跡と農民の労働を結びつけるべきである。羊の意見が述べられた。

③ その他

農民の耕地技術の発展が、築城技術・河川技術を発達させたのであって、その逆ではない。
(以上・今井氏)

第17回例会
三橋先生出版記念会

4月21日(土)
3時～ 東区5F会議室
書評会

5時～ 北白川・あたか飯店
祝賀会

第17回例会は、左記の要綱で開きますので、よろしく御出席下さい。場所は、内線6200・徳永まで。

会報No.3となり、月1回4ページの建ての発行を定着させることができました。更に充実させるために、報告以外の積極的な御投稿をお待ちしています。